
王者と私

rena

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王者と私

【Nコード】

N4685H

【作者名】

rena

【あらすじ】

地上界に來たムントとデートをするユメミのお話です。正直言ってまともや激甘にしました。二人の仲を取り持とうと奮闘するマテユとテオが涙ぐましいです。最後にルイが、ちよこつと出ます・・・。

「ムント様！」

「何だ？」

ムントはソファに座りながら自室で本を読んでいた。

その彼の前にはマテユとテオが何か絵と写真のようなものを手に持っていた。

お見合いの為のものである。

まずテオが「ムント様、こちらは、さる貴族の姫様で由緒ある家柄のお方、知性と美貌を重ねそなえた素晴らしい……」

「人は知性や美貌だけで決まるものではない。」

ムントの手がページをめくる。

負けじと、今度はマテユが「では、こちらを！この方は代々、国を脅かす魔獣を倒してきた家系のお血筋。勇敢なお方で先月は悪さをするドラゴンを倒し、名誉ある傷が額に残ったほどの勇者にございます。」

その絵には筋肉モリモリ、顔はオカメの巨大女が描かれていた。

「……マテユ、テオ。」

「はい？」

「すまないが、今は読書中だ。部屋を出てくれないか。」（静かなる怒り）

「は、はい……。」

一瞬間まった二人は、すごすごと引き下がった。

「はぁ……今回も駄目でしたな。」

溜息を吐きながらマテユが呟いた。

「やはりムント様のお心にはユメミ様が住んでおられるのか。」

テオも肩を落とす。

「しかし、このままではいかん。一日も早くご結婚なさってください

らなければ王家は・・・。」

テオは涙がホロリと零れた目に右手をやった。

するとマテユが、「おお！そういえば3日後に、ムント様がユメミ様に会いに地上界へ行きなさる。その事をすっかり忘れておったわ。」

「パツと、テオは明るい表情になり、「何故それをもっと早く言わん！そうか、ムント様が・・・。」

「そこである計画を思いついた。」

キラリと、マテユの目が光った。

「お二人の仲を取り持たなければ。誰か協力者が必要じゃ。思い当たる人物はおるか？」

「それなら良い者達がおるぞ！」

テオもやる気満々である。

再びガッツポーズをとる二人。

懲りない人達である。

「で？」

「我々にどうしろと？」

シュザとパルカを呼びつけ、事の次第を説明した。

「人の恋路は他の者が関わるものではないと思うが・・・。」

複雑な表情のパルカ。

「ムント様のお世継ぎの為なのです！！」

「王家の大事ですぞ！！」

血走った目の二人の鬼気迫る迫力に、シュザとパルカは圧倒されてしまった。

「分かりました。」

「引き受けましょう。」

さて、ムントとユメミのデートはどうなるやら・・・。

ふんふーん♪

鏡の前で少女が髪を梳いている。
豊かな栗色の髪である。

少女は人形のように美しかった。

大きな瞳、薔薇色の形の良い唇。

身につけたピンク色のワンピースが少女の白い肌を引き立たせていた。

「なにを鼻歌をしてるの？お姉ちゃん。」

幼い弟がひよこつと現れた。

「これからお出かけ？あー、もしかしてムントさんとデート？」

うしし、と笑う勘の鋭い弟にユメミは一瞬戸惑った。

「ちよ、ちよつと友達の所へ行くだけよ！じゃあ、行って来る。」

そそくさと部屋を出て行くユメミであった。

水溜りのある小道をユメミは走り抜ける。

水飛沫が少し上がり、キラキラと輝き、少女の華奢な足に散りばめられていく。

それに構わずユメミは小さな丘の上まで駆けていった。
一番会いたい人の所へ。

「来たか？」

「いや、まだだ。」

地上に來たマテユとテオは木々に隠れ、ユメミを待っているムントの様子を窺っていた。

「本当に来て下さるのだろうか。普段お互い離れている身では心も移ろいやすいもの。ユメミ様は今頃……。」

「いや、きつと来る。彼女はそういうお方だ。私には解る。」

テオは二人の絆の強さを知っていた。

二人には断ち切れない心の繋がりがあある事を。

遠くで人影が見えてくる。

それはだんだん大きくなり、少女の姿を形づくる。

「お、来たぞ！」

マテユが気づいた。

「ユメミ様・ますます美しくなられた。」

少し見とれるテオ。

「お待たせ、ムント！」

「やあ、久しぶりだな。」

木に凭れていたムントの瞳がユメミの瞳と視線が合う。

ムントは上下黒いシャツとズボンの身なりをしていた。

少し背が高くなったような気がする。

その男らしい魅力にユメミは一瞬ドキリとしたが、悟られまいとし、

「じゃあ、行きましょ！」

ムントの手を引き歩き出した。

「動き出したぞ！急げ！！」

「待て、我々の服装を変えてからにしよう。」

慌てるマテユをテオが引き止めた。

行動に関しては冷静である。

「あ、そうか。」

空はよく晴れていたが昨日は雨天だった為、道のあちこちには水溜りができていた。

地面に空が映り、幻想的である。

ムントとユメミはその道を歩いていた。

「あ・・・ここ・・・。」

見慣れた通学路の道。

「ねえ、ムント。覚えてる？」

「ん？」

「ここは私とあなたが初めて出会った場所よ。」

そう、忘れもしない運命的な出会い。

大切な思い出。

突然、目の前に現れた彼は彼女に強烈な印象を残した。

「ああ、そうだな。」

ムントは懐かしそうに目を細めた。

「あの時のムントは、とても張り詰めたような顔をして迫ってくるから、ちよつと怖かったわ。」

笑いながらユメミは当時の心境を述べた。

「そ、そうか？」

頬を右手の人差し指で掻くムント。

今の彼には以前のような荒々しさは少し失せ、落ち着きが出ている。王としての威厳が具わっているのか。

「今はどう見える？」

ムントはユメミの顔を覗き込んだ。

「うーん、大人びてきたかな。でも、まだちよつと意地っ張り。」

「言ったな、こいつ。」

ユメミの額を軽く左手の人差し指で小突こうとしたが、あっさりかわされてしまった。

ユメミがクスクス笑いながら歩き出そうとした瞬間、（パシャッ！）ユメミの足が水溜りに浸かってしまった。

「あ……。」

幸い靴まで濡れただけだったが、靴下も少し被害をくらっていた。

「余所見をしているからだ。」

笑いを堪え、ムントが近づく。

「きゃあ！」

ムントは、ひょいっとユメミを抱き上げた。

お姫様抱っこである。

「こつすれば濡れずに済むだろう。水溜りが少ない向こうまで連れて行ってやる。」

「え、でも恥ずかしい……。」

そんなユメミに構わず、ムントは軽やかに水場を飛ぶ。

澄み切った青空を映す水溜りに二人の姿が映る。
まるで空の上を戯れて飛んでいるようだ。

（ムント・・・。）

ユメミはムントを見上げた。

その端整な顔、鮮やかな炎のような髪。

筋骨逞しい身体。

それが今、間近にある。

父とは違う男の人の匂い・・・ユメミの頬が赤く染まる。

（このままどこか遠くへ行きたい・・・。）

ユメミは目を閉じ、ムントの広い胸に顔を凭れさせるのだった。

賑やかな人の声。零れる明るい談笑。

遊園地、モンタローランドである。

「ユメミ、ここは何だ？」

珍しいものを見るように辺りに視線を巡らすムント。

「遊園地のモンタローランドよ。ここで色々な乗り物に乗ったりして遊ぶの。あ、あれにしましょ！！」

はしやぎながらグイグイとムントの腕を引くユメミ。

ここの料金の払いは全て彼女である。

バイト代が貯まったので今回ムントを誘ったわけだが、理由はそれだけではなかった。

ムントに地上の事をよく知ってほしかったのと、彼と一緒にいる時間を増やしたかったのだ。

「うまくいっているようですね。」

「ああ、そうだな。」

ザッと、頭に葉をつけながら木陰からマテユとテオは顔を出した。
マテユは帽子にスーツ姿の上下茶色の紳士的な格好で、テオはチャイナ服を着ていた。

「油断はならんぞ。これから作戦に移る。」

テオは口を、への字に結んだ。

「ユメミ。」

「なあに？」

「その・・・このままじつとしているのもいいが・・・。」
「ん？」

「いや、何でも・・・。」

その時が近づく。

「緊張してるの？ムント。」

「そ、そんな事はないぞ！」

あくまでも強気。

「俺様がこんな事ぐらいで臆するわけがないだろう。」
「そうよね！」

そう言いながらも、彼の額は汗がびっしょりである。

「こういうのもまた面白そうだ、な、と・・・う、あ・・・。」
「ガクン！」と、身体が揺れて前に倒れる。

うわあああああああああああああああああああああ・・・
・・・

凄まじい未体験ゾーンに落ちていく王様であった。

「ごめんね、いきなりこんなのに乗せちゃて。大丈夫？」
ぐったりするムントを気遣うユメミは彼の身体を支えた。

所謂ジェットコースターである。

「いや、平気だ。心配するな。」

気丈な彼は何でもないように前へ歩き出す。

（もう、素直じゃないんだから。）

クスリと笑みを零し、ユメミは後を追った。

平和そのものな、無邪気にメリーゴーランドに乗る子供の姿。
それから離れた所のベンチにムントは座っていた。
疲れているようである。

「ムント！」

両手に何かを持ってユメミは彼の右隣に座った。

「これは？」

手に渡されたものをムントは、まじまじと見た。

「ソフトクリームっていうの。冷たくて美味しいのよ。あ・・ムント食べられるっけ？」

彼は食物を摂取しない。

アクトを体に取り込んで生きている。

「食べられない事はないが・・。」

「そう、良かった！」

ユメミはホッとした。

ムントは、その未知なるものを少し舐めてみる。

「どう？」

彼の顔を覗き込むユメミ。

「・・甘い。」

尤もらしい最初の感想。

「ムントはアクトを吸って生きているんだよね。アクトって美味しいの？」

「味覚はないが、美味いとか不味いとか感じる事はあるぞ。」

ムントはユメミの方を向いた。

金色の瞳がユメミを捉える。

その深い、人の心を射抜くような双眸にユメミは一瞬硬直した。

「特にお前の中のアクトは極上だ・・。」

「おお、良いところですよ！」

相変わらず木陰で二人を見守るマテユとテオ。

「誰も邪魔が入らないように見張っていなければ！」

と、その時マテユの後ろに犬が来た。

いかにも怖そうなワンちゃんである。

マテユは犬に気づき、追ひ払おうとした。

「しっしっ、あっち行きなさい！」

ムントとユメミの唇が触れ合おうとした時・・・、
「あんぎゃー！ー！！！！！」

木陰から絶叫が木霊した。

「な、何かしら！」

ユメミが顔を上げた。

「どこかで聞いた事があるような・・・。」

汗を頬に一筋垂らすムントであつた。

「何をしておるか！馬鹿者！！！」

「すまない、この犬が・・・。」

ワンちゃんに噛まれたお尻を撫でさすりながら、マテユはテオに謝つた。

「これではぶち壊しだ！次の作戦を考えるぞ！！！」

テオは見事な歯型のついた尻をさするマテユの後ろ襟首を掴み、引きずるようにしてその場を離れた。

暗い通路。

蠟燭の灯りが辺りを不気味に浮かび上がらせる。

「お化け屋敷」である。

「ム、ムント。」

「ん？」

「何だか寒くない？」

「いや、別に。」

ユメミはムントの左腕にしがみついていた。

髑髏やゾンビの人形があつてもムントは眉一つ動かさない。

霧のような白い煙が出てきて何かが飛び出した。

「きゃあああ！！！」

ユメミはムントに抱きつく。

「臆病だな、ユメミは。」

「だって……。」

「よし、いい調子ですぞ。」

物陰でお面を外したマテユは満足気である。

お化けに扮して、怖がらせて二人を近づかせようとしていた。

「よくやった。おお、もう面を外しても良いぞ。」

と、テオ。

「……。」

もう付けてないのに。

外は、まだ明るかった。

ムントとユメミは小道を歩いていた。

道の横に花屋があり、ユメミの目を引いた。

「綺麗……。」

一際目立つ赤い薔薇にユメミは手を触れた。

「ムントは、この花のような人ね。」

少女は微笑む。

「その花は？」

「薔薇っていうの。花言葉は情熱。」

「じゃあ、その花をお前が好きになってくれたら嬉しいな。」

ユメミは頬を紅色に染めた。

「若いとはいいいものだのう。なあ、マテユ・ん？」

テオが後ろを振り返ると、「テオ殿」なかなか楽しいですぞ……

。。

飛行機のような乗り物に乗り、円を描くように飛ぶマテユ。

「……。」

呆気にとられるテオであった。

「いい風……。」

花が咲き乱れる地面に座り、ユメミが呟く。

ムントが、その左の横に座っていた。

ムントはふと、足元に咲いている花に気づく。

「これは・・・鳥の様な形をしているな。」

「それはサギソウよ。花言葉は清純。」

ムントはその花を手に取り、ユメミの髪に飾る。

「まるで、お前のようなだ。可憐で美しい・・・。」

「や、やだ、ムントったら！」

恥ずかしがるユメミの膝に彼は、さり気なく頭をのせる。

「ムント？」

「暫くこのままで・・・少し眠い・・・。」

そのまま軽い寝息をたててしまった。

（ムント可愛い）

ユメミは心の中で呟き、ムントの赤い髪を撫ぜる。

彼は彼女に母親を求めているのか。

それを知るのは、暖かい風だけ・・・。

「お二人も順調ですし、我々も楽しみたいぞ！」

「いや、何だか童心に返った気分だな。」

マテユとテオは、ある乗り物に乗っていた。

「ところで、これは何という乗り物なのだ？」

「確かジェットコースターでしたぞ。」

ガクン。

ああああああああああああああ・・・

ゾクゾクする恐怖の世界に旅立つ二人であった。

ガタン、ゴトン。

周りから軋む音。

窓からは様々な景色が過ぎていく。

外は日が暮れ、オレンジ色の夕日がビルや犇く人々の姿を照らし、浮き彫りにしていた。

ムントとユメミは帰りの電車の中にいた。

「夕焼けが出てる。明日は晴れるわね。」

二人は並んで座席に座っていた。

ムントの右肩に、ふわりつと甘い香りと豊かな髪がのる。

ユメミが肩に凭れているのだ。

「ムントの国では、どんな乗り物があるの？」

「我が国では、魔導によって瞬間移動が可能だ。あまり機械などには頼らない。遠出をする時などは、飛行する船や飛竜などを使う事もあるが……。」

「そう……空を飛ぶって素敵ね。私もそういうのに乗ってみたい。」
夢見るような瞳で静かに呟き、ユメミは目を閉じた。

「ムントと一緒に……に……。」

少女は、そのまま眠りに落ちていった。

ムントの匂いに包まれて。

「ユメミ。」

いつか、そんな日が来るのだろうか。

二人でどこまでも続く美しい青い空を眺める時が。

その時、二人は……。

ユメミ、いつかお前とあの空を。

愛しい少女と寄り添うように、少年もまた深い眠りに落ちていった。

「マテユ。」

「はい？」

「私はもう、あんなのは懲り懲りだぞ。」

「はぁ……いい……。」

デッドゾーン擦れ擦れの体験をしたテオとマテユは、人知れず道端

で仰向けになつて夢の世界へ行きかけていた。（逝く寸前）

夕闇が迫る家々、辺りから立ち込める夕食の匂い。

人気のない道を電車から降りたムントとユメミは歩いていた。

ふと、前から子供が駆けて来て二人の横を通り過ぎていく。

右手に一つ風船を持ったその女の子は、帰りが晚くなったせいだろうか、とても急いで走っていた。

（ドンッ！）

その子は運悪く前方にいた大人にぶつかり、そのまま倒れてしまった。

当然、風船は手から離れ、女の子は泣き出してしまった。

その大人は4人の男で、いかにも不良つて感じの外見だった。

「大丈夫！？」

ユメミはその子に駆け寄り、抱き起こした。

「お、何だ？こんな所にカワイコちゃんがいるじゃねえか。」

「俺達と、どつかで遊ばない？いい所へ連れて行ってやるぜ！」

空気が張りつめる。

「こ、これは！予定が違いますぞ！！」

「確かシュザとパル力が不良に扮して現われ、ムント様が一掃し、

その格好良さをユメミ様に見せつける場面だった筈！まずい事になったぞ……。」

石壁に隠れていたマテユとテオは焦った。

その時、マテユは足に何かを踏んだような感じがした。

「ん？」

（グルル・・・）

遊園地での強面ワンちゃんである。

しつかり尻尾を踏んでいた。

わんわんわん！！！！

「ひええええええ！！！！！！」

マテユは一目散に逃げ出した。

「お、おい、どこへ行く！！えーい、まったくもう！！」
後を追うテオであった。

（がしっ）

後ろから不良の右肩に左手を置くムント。

「何だ？てめえは。」

「その娘は俺様の連れだ。手を出すな。」

ムントは彼らを睨みすえる。

「お前は、すっこんでな！！」

殴りかかる不良の一人をムントは避け、不良はよろけて石壁にぶつかる。

「野郎！！」

次に襲いかかる男の後ろの首にムントが手を触れると男は気絶した後、残るは二人。

「このやろう、貴様・・・！！」

「貴様ではない。ムント様と呼べ！！」

ムントは親分らしい男の尻を遠くまで蹴飛ばした。

ああああああああああああ・・・。。

（キラーン

）

「あ、兄貴！！！！」

夕空の星となった親分を子分は追いかけるのであった。

「ムント、大丈夫？」

「ああ、何でもない。」

何事も無かったかのようにムントはユメミに近づく。

風船が家の屋根に引っかかっていた。

彼はジャンプして風船を取り、女の子に渡してあげた。

「ありがとうお兄ちゃん。これあげる。」

その子は自分のポケットから小さなキャンディーを差し出した。

「ありがとう。」

その頃、シュザとパルカはある場所の地面に座りながらムントとユメミが来るのを待っていた。

シュザは顔に蜘蛛の刺青風のメイクをし、背中に竜の絵の入ったジヤケットを着ていた。

パルカはデーモン小暮風のメイク、（頭も小暮と同じ）黒い上着の左胸に「男坂」と、書いてある。

「遅い。まだ来ないのか？」

パルカは痺れをきらしていた。

「若者は時間がたつのを忘れて遊ぶものだ。短気になるな。」
シュザは落ちついている。

「くそー、可愛い女の子紹介してくれるっていう条件に乗った俺が馬鹿だった。」

ガクツと頭を垂らすパルカ。

「まあ、人生甘いものではないさ。もう少し待とう。」

苦笑気味にシュザは一番星の輝く夕闇を見上げた。

真っ暗な夜空に無数の星が瞬く。

気が遠くなるほどの人類の歴史を見てきた星々の下、ムントとユメミは川原の近くの道を歩いていた。

ムントの後ろで歩くユメミは俯きながら何か言葉を探していた。

このまま時が過ぎていく。

もうすぐ家に着いてしまう。

その前に、いっぱいお話がしたいのに。伝えたい事は沢山あったのに。

「ユメミ。」

口を開いたのはムントだった。

「はい。」

ユメミの心臓が跳ねる。

「今日は、ありがとう。楽しかった。」

静かな声。

「そう、楽しんでもらえて良かった。」

言葉が続かない。

もつと彼の声が聞きたい。

「地上の事が解ってきたような気がする。地上の人々も天上人も同じ人間だ。皆平和を願い、人を愛する優しい心を持っている。」

ムントは先ほどの女の子から貰ったキャンディーをポケットから取り出して見つめた。

「俺様はこれから、もつと多くの事を学ばなければならない。知らない事も沢山ある。乱暴でどうしようもなかった俺様に人として大切なものを教えてくれたのはユメミ、お前だ。」

「ムント……。」

ムントはキャンディーを握りしめた。

「改めて誓う。どんな事があっても、お前とこの地上を守る。天上界と同じように俺様は、この地上も愛そう。それが天上人が犯してきた罪へのせめてもの償い……。」

ムントの背負っているものは、計り知れないほどの重いもの。

恐らくそれは彼が死ぬまで……。

その戦いは想像を絶するものになるだろう。

ならばユメミは……。

ユメミはムントを後ろから抱きしめていた。母親のように。全てを包み込むように。

「ムントならきつと大丈夫。あなたなら二つの世界の調和を、世界を見守ってくれるって。私、信じてる。」

ああ、ムント。

いつも貴方の側にいてあげられたら……。

彼女は未熟。

彼を支えるには、あまりにも幼すぎた。

まだ勉強に励まなければならない。

いつか自分が大人になったら、今よりも強くなっているだろうか。
大らかな心を持って彼と向き合えるだろうか。

ユメミは強くムントを抱きしめた。

「ユメミ。」

こうしているだけで、心の不安やシコリが流される。
いつまでも、このままでいたい。

ムントもまたユメミと離れたくなかった。

甘く辛い時が過ぎていく。

暫しの沈黙の後、ムントはユメミの方へ体を向けた。

「俺様がここまで頑張れたのも全てお前のおかげだ。感謝している。
何かお礼がしたいのだが・・・。」

「そんな、お礼だなんて。」

「何でもいい。好きなものを言ってみる。」

突然そんな事を言われても戸惑うが、ユメミは、ちょっと恥ずかし
そうに

「じゃあ、ムントが欲しいと言ったら？」

悪戯っぽい円らかな瞳に見つめられて、大胆な発言にムントは少し驚
いた表情をしたが、それは穏やかな微笑みに変わっていく。

「もう疾うに俺様は、お前のものだ・・・。」

ゆっくりとムントの顔がユメミに近づく。

ユメミは静かに目を閉じた。

神様、今はこのままで・・・。

満天の星が輝く。

二人を祝福するかのように。

天空の王宮で共に見た時と同じ美しい月明かりに照らされながら、
二人はそっと熱い口づけを交わすのだった。

「ムント。ユメミ様に会えたか？」

「ああ。」

「地上界はどうだった。ご感想は？」

「そうだな、甘かった・・・という言っべきか。」

「え？」

「いや、何でもない。」

数日後、ムントの元に一通の手紙が届いた。

封筒の中には文とサギソウの押し花栴が入っていた。

ユメミ、この花をお前だと思って愛でよう・・・。

ムントは、その花にそつと唇を触れさせるのだった。

「この服なんてどうですか？」

「いやゝもつと渋くキメねば!!」

マテユとテオはすっかり地上が気に入り、また行く気満々である。
着ていく服を選んでいるところにルイが通りがかった。

「お前達、何をしている。」

ビクツと体を緊張させる二人。

「こ、これはルイ殿!!」

「い、いや、服を新調したのでお互いどれが似合うか見立てを・・・」

「どうせまた地上界に赴くつもりだろう。」

ルイの目が光る。

「そ、それは・・・。」

額に汗のマテユとテオ。

「お前達だけズルイぞ！私も連れて行け!!」

「へ？」（二人同時）

ルイが地上で活躍するのは、また次のお話・・・。

（後書き）

ムントとユメミは戦いの中で成長したと思います。

ムントは二つの世界を守り、きつとユメミは彼を影で支えていくでしょう。

最後はユメミを包容力のある女の子にしてみました。

天上人は食事をしないし睡眠もとらないという設定があるようですが、この小説では食べようと思えば食べられるし、寝ようと思えば眠れる事になっています。（なんて勝手な設定）

手紙の事ですが、両世界を行き来できる天上界の伝書鳩を使って文通してたらいいなーと思って書きました。

ムントが押し花の栞を本に挿んで読むのです。（想像すると鼻血）

ユメミはムントのマントを貰いましたから、そのお返しって事で、ルイが地上に行くお話も書きたいと思っています。

それでは、拙い文章失礼いたしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4685h/>

王者と私

2010年10月9日01時13分発行